



Shadow in the House _ Ashiya City Library - Uchide branch, 2017



Shadow in the House #02_The Former Kawamoto House (Japan, Nara, Yamatokoriyama), 2014

大坪晶の写真

表現学部教員であるアーティスト大坪晶は写真技法を表現手段としながら「人間の存在と記憶の関係性を考察」することを作品のテーマとし続けている。学部学生時代に臨床心理学を学んだとのことだが、その体験が根底にあるからだろうか、あるいはもとより写真、殊に銀塩写真が撮影対象から引き寄せたうえで内部に留めおき、時間の経過とともに醸成してゆくあの得体の知れぬ饒えたようなエネルギーに魅せられていたのか。

その興味の在処は本格的にアーティストを目指し、東京藝大先端芸術表現科の修士課程入学と前後して制作した《Encounter》(2008-10)に既に顕現している。このシリーズは乗用車の車窓から、一瞬で過ぎゆく光景、主には生活感を伴う人物像を捕捉した光景をプリントしているが、それら刹那の光景は、我々の記憶に明瞭に残存することはないが、僅かながらも潜在的にひとの記憶と経験を刷新して行く。

アーティストとしての大きな転機は、大学院修了後に留学し滞在したブラハでの体験にある。市街の蚤の市で古書や図鑑を入手しては、作品に応用することを始めている。古書や古物とは、そこにかつてそれらを愛でたのであろう所有者たちの視線の痕跡、ページを繰ったであろう動作、触覚の感触の記憶が蓄積されている。巡った後の所有者に、知る術のない彼らへの想像力を媒介しながら掻き立てるものだ。そしてやがてまた、新たな記憶を付加しながら、次なる持ち主へとその在処を替えて行く。

帰国後、やがて取り組むようになったのが、何代にもわたってオーナーや住居者が替わりながら現代まで受け継がれて来た建築、家屋に蓄積された無名の記憶を記録するカラープリントである。



Shadow in the House_Former Tadatsugu Honda House, 2017

《Shadow in the House》と題されたこのシリーズでは、戦後進駐軍に接収され、彼らの生活様式に適合するよう改造された建築、接収住宅を主要な題材としている。終戦までの住民、接収中の進駐軍関係者とその家族、そして接収完了後の住居者、それぞれの記憶が蓄積されている住宅を調査の末に探し当て、公文書を検索し、所有者、住居者や関係者から聞き取り調査を行い、彼らの記憶を参照しながら慎重にフレーミングを決定してゆく。そして、生活の空間であった証左として、人物＝ダンサーの行為の痕跡を長時間露光によって痕跡づけることもある。

C プリントの柔らかな階調の効果もあり、生活空間であった時間が重畳されていることを確かに感覚されるのである。

和光大学には、小瀬村真美の後任として 2019 年に赴任した若手教員である。これからは、多くの後進たちの記憶に痕跡を残す教育者でもあって欲しい。（芸術学科・半田滋男）

おおつぼ あきら：1979年兵庫県に生まれる。京都文教大学で臨床心理学を専攻、その後アーティストを目指し東京藝大大学院先端芸術表現科に入学、在学中は鈴木理策、佐藤時啓らに師事。写真技法を媒体とする表現をはじめ。修了後、チェコに留学、プラハ工芸美術大学でリトグラフ技法を学ぶ。また、古写真、図鑑などから採集したイメージからなるカラーージュにも取り組む。帰国後、建築に蓄積された無名の人々の生活の痕跡を視覚化する制作に取り組んでいる。近年では進駐軍が接収した住宅を取材の対象とした《Shadow in the House》が代表作。その成果は数次にわたって個展で発表されている。最近ではトーキョーアーツアンドスペースでのレジデンスの成果展「デイジーチェーン」で、映像を含むインスタレーションのかたちで発表された(2020)。和光大学には 2019 年に赴任。



Encounter 2009



Shadow in the House (「デージーチェーン」 トーキョーアーツアンドスペース 2020) インスタレーションビュー